



The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 52 号

(2017 年 12 月 23 日)

発行所：立正大学心理学部 西田公昭研究室

日本グループ・ダイナミックス学会

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：西田公昭

編集担当：杉浦淳吉

訂正：優秀論文賞の対象年度の表記に誤りがありました。お詫びして、訂正いたします。
(誤) 2017年度 (正) 2016年度 (2021.3.22訂正)

目次

★★★ 日本グループ・ダイナミックス学会 第 64 回大会後記 ★★★	2
● 大会準備委員長から：唐沢かおり（東京大学）	
★★★ 第 64 回大会参加記 ★★★	3
● 小玉一樹（福山平成大学）／黒川雅幸（愛知教育大学）	
五十嵐広晃（札幌大学）／鳥山理恵（東京大学）	
★★★ ¹⁶ 2017 年度 優秀論文賞 ★★★	6
● 選考経過と結果の報告：三浦麻子（関西学院大学）	
● 受賞者の声：樋口収（北海道教育大学・現所属 明治大学）／日比野愛子（弘前大学）	
★★★ 2017 年度 優秀学会発表賞 ★★★	9
● 選考結果の報告：有倉巳幸（鹿児島大学）	
● 受賞者の声：伊藤言（東京大学）／木村真利子（立正大学）／宮島健（九州大学）	
★★★ 国際学会大会参加記 ★★★	13
● 鈴木啓太（東京大学）	
★★★ 事務局からのお知らせ ★★★	14
● 研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について	
● 国際学会発表支援制度について	
● 実験社会心理学研究 掲載予定論文	
● 次年度大会について	
★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★	16

大会準備委員長
唐沢かおり (東京大学)

秋の穏やかな空気と天候の中、銀杏並木が色づく東京大学本郷キャンパスにて、9月30日、10月1日の二日間にわたり、第64回日本グループ・ダイナミックス学会を無事に開催することができました。東京大学での開催は、1989年の第37回大会以来、実に27年ぶりのことになります。大会には、関東近辺のみならず遠方からもご参集いただき、ここ数年間では最多の237名の方々が集う大会となりました。

開催場所の法文1号館、2号館は「歴史がある建物」だけに、エレベータやWiFiの設備なども整っておらず、参加者の皆様方にはご不便をおかけいたしました。いずれも建物が迷路のような構造になっておりますので、会議や発表の教室を探すのに苦労なされ、建物の中を、さ迷い歩くはめに陥った方もおられたとのこと。文学部の研究室が集うエリアの階段の脇には仏像なども置いてあるのですが、薄暗くて、やや怖いエリアでもあり、「ぎょっ」となされたかもしれません。



さて、今年度の大会研究発表は、社会的認知や態度、対人関係から、集団意志決定、産業・組織という社会心理学の基本的なトピックに加え、消費者行動、災害、医療、法と心理学などの応用分野など、グループ・ダイナミックス学会に集う皆様の幅広い研究への関心を反映した内容でした。口頭発表、ポスター発表、ワークショップのいずれの会場も、多くの方々に賑わっておりました。学会の醍醐味の一つは、興味関心を共にする方々や普段の業務や学業で接する機会がない方々と、直接の意見交換ができることにありますが、それを十分に楽しんでもいただきましたなら幸いです。

また、常任理事会との合同企画として、今回は学部生発表の枠を設けました。口頭とポスター、合わせて12名の発表がありました。次世代を担う彼らが、学会で自らの研究を語り、それに対して厳しくも温かいコメントを皆様から頂き、議論を交わす機会を得たことは、貴重な経験になったことと思います。

準備委員会企画シンポジウムは「社会心理学の意義を語る：知としての価値、そして公共性」というテーマで開催いたしました。学融合、社会連携、実践的な知、学術からの新たな価値の創造など、様々なスローガンが飛び交うようになり久しく、社会心理学はこれらのいずれとも深く関わってきました。その中であって、他領域からのご意見やご期待を知り、さらなる展開へと進むために必要なことを論じる場としての企画でした。人間行動進化学の研究に携わっておられる長谷川寿一先生からは、「人間の社会性」を扱う社会心理学固有の意義にとどまらず、総合人間科学の一翼としての立ち位置を持つことの重要性、さらには、公認心理師資格など公的な制度での貢献を示すことへの要請が語られました。科学哲学者の戸田山和久先生からは概念工学（重要な

概念を人類の幸福に資するように設計しなおす)、表象の進化史という新たなプロジェクトの構想と、それらに対する協同のお誘いをいただきました。指定討論お一人目の浦光博先生は、社会心理学が内包する現象と変数の重層性を越える枠組みを生み出す教育システムの必要と、公認心理師における「社会・集団・家族」科目名問題を社会的要請ととらえ、チャンスとして生かす必要が論じられました。お二人目の亀田達也先生は実験社会科学の構想の提示と、それを踏まえ、知としての価値と公認心理師、社会心理学と「福利」の関係に関する問題の指摘がありました。

初日夜の懇親会は、本郷キャンパス内の山上会館にての開催でした。乾杯のご発声は古畑和孝先生に行っていただきました。古畑先生は、東京大学にて開催された第37回大会の際、大会委員長をおつとめになったのですが、学会の発展を祝うお言葉とともに、当時の資料にもとづき、両方の大会で発表している方々のお名前をご紹介いただきました。この間のときの流れを感慨深く思われた方も多かったのではないのでしょうか。また、多くの先生方から美酒のご寄付をいただき、それらを並べたテーブルの周りには、(例年のごとく)酒客の皆様方の輪ができておりました。予想以上に多くの方々が当日参加をしてくださり、お料理があつという間になくなったこと、申し訳なく思っております。

2日間の大会の期間中、不行き届きのことも多かったと思いますが、皆様にはいたわりと感謝のお言葉をいただきました。大会の準備に際しましては、前回大会開催校・九州大学の山口裕幸先生、池田浩先生に多くのご助言をいただきました。また、常任理事、理事の先生方には、発表者数の確保にご尽力いただくなど、開催を支えていただきました。準備委員としてご協力いただいた皆様方、また当日のお手伝いをいただいた皆様方のお力があってこそ、無事に大会を終えることができました。皆様に改めて深く御礼申し上げます。最後になりますが、来年の神戸大学での大会も、盛会となりますよう、お祈りいたします。

★★★ 第64回大会参加記 ★★★

○ 小玉 一樹 (福山平成大学)

2017年9月30日から10月1日にかけて開催されたグループ・ダイナミックス学会第64回大会に参加しました。私が研究者になったのは、ごく最近のことです。学部の学生時代や企業勤務時代には東京に長らく住んでいたのですが、東京大学に行ったこともなければ、見たこともありませんでした。今回の大会は東京大学で開催されるということでしたので、見学も兼ねて参加し、初めて赤門と安田講堂を見ました。

グループ・ダイナミックス学会でポスター発表するのは今回で2回目になります。1回目の大会での発表は大学院生時代に遡りますが、その時もポスター発表でした。もちろん、これまで他の学会では口頭発表もしてきましたが、私は研究に対する率直な意見がダイレクトに聞くことができるポスター発表が好きです。

前回の九州大学で開催された大会では口頭発表やポスターセッションの様子をじっくりと聞き見て回りました。そこで気がついたことは、人が多く集まるポスター発表はその内容はもちろん

のこと、ビジュアル的にも何か引きつける工夫があるということです。口頭発表でもポスター発表でも、聞き手が少ないことは非常につらいものです。そこで今回の発表では、分析結果も興味深い内容でしたので、イラストも使いながら見やすいポスターを作成してみました。その結果、多くの方々からご意見やご指摘をいただくことができ、名刺交換もできました。今回のご意見やご指摘をいただいた方には、実務に携わる方が多かったことが印象的でした。実務に携わる方々の悩みは皆同じなのだと改めて感じた次第です。

私の研究分野は経営学であり、経営の観点から組織内の人に着目した研究をしています。そのため、グループ・ダイナミクス学会での発表はどれも興味深い内容です。また、研究方法に関しても参考となるものばかりです。「この研究を、対象を学生ではなく企業で働く人たちを対象とするとどうなるのだろう」と思いながら見聞きしていると、研究だけでなく経営の実践に活かすことはできないかと思います。

そのほかにも、私がこの学会について参加してしまう理由があります。それは、懇親会にあるといっても良いでしょう。この学会の懇親会は、他の学会では見られない、なんとも言えない温かさを感じてしまうのです。初めて参加する人たちを温かく迎え入れ話し合っている姿や、著名な先生方とまだ若い研究者が酒を酌み交わしながら会話している姿を見るにつけ、この学会は“開かれた学会”というイメージが私にはあります。こうしたイメージが学会そのものの敷居の低さに関係しているのだと思います。

最後になりましたが、大会運営にご尽力いただいた準備委員会の先生方や学生スタッフの皆さまに厚く御礼申し上げます。

○ 黒川 雅幸（愛知教育大学）



2017年9月30日、10月1日の2日間に渡って、日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会が東京大学本郷キャンパスで開催されました。東京大学を訪れるのは、私にとって初めてのことであり、学会参加もさることながら、歴史ある建物を拝見できることを大変心待ちにしておりました。開催日当日は、天候に恵まれ、穏やかな秋晴れを臨みながら学会に参加することができました。

2日間の間、私はショート・スピーチ2、総会、シンポジウム、ポスター1、懇親会、ポスター2に参加しました。どのセッションも議論の時間が足りない！と思えるくらい内容の濃い議論がされていました。シンポジウムでは、社会心理学者のアイデンティティを問うような話題が提供され、社会心理学とは何かについて改めて考えさせられました。

私は、ポスター2において『ネットいじめ目撃者の非当事者攻撃に関する研究—仲間集団を内集団とした検討—』という演題で発表をさせて頂きました。残念ながら、仮説通りの結果が得られなかった研究ではありましたが、分析方法や新たな条件の追加など、自分では思いつかないようなたくさんのコメントを頂きました。思わぬヒントを得られた時ほど、学会に参加して良かったと思うことはありません。

懇親会は盛況な賑わいであるにも関わらず、どこかアットホームな雰囲気があって、楽しい時

間を過ごせました。また、経験が浅い私は誌面上でしか存じ上げなかった古畑先生のスピーチを直に拝聴することができ、大変有意義でした。さらに、多くの先生方から会を盛り上げる銘酒の差し入れがありました。数多くの有名な銘柄のお酒が並ぶ中、私は浦先生が差し入れて下さった魔王超えと言われる「七窪」というお酒を頂きました。フルーティーな味わいですっきりした後味が絶品でした。

最後に、大会運営にご尽力頂いた大会委員長である唐沢先生をはじめ、スタッフの皆さまに心より感謝申し上げたいと思います。また、次年度に神戸で開催される第 65 回大会では、大学のあ
る山の上から降りることなく、活発な議論ができることを大変楽しみにしております。

○ 五十嵐 広晃 (札幌大学)

2017 年 9 月 30 日、10 月 1 日東京大学で行われた第 64 回グループ・ダイナミックス学会に参加させて頂きました。自分は学部卒業後、研究生制度を利用しています。このような身分にも関わらず、指導教授が機会を与えて下さいました。今回初めての参加で振り返ってみると、反省だらけでした。

自分の発表を終えた感想として、1 番に叫びたいのはとにかく緊張の連続でした。まず、自分の発表が初日で、しかも午前の部の一発目に発表があったということと、また、当初、学生や院生、自分に近い年齢の人も発表するだろうと思っていたのですが、誰 1 人としていなかったことに恐々となりました。

発表態度についてです。発表はパワーポイントを使うのは必須のことですが、自分は台本を作ってそれを見ながら発表しました。が、台本を見ながら発表していたのは自分だけだったので、非常に情けなく、とても恥ずかしかったです。今後、グルダイに関わらず、他の学会で発表させて頂く機会があれば、このようなことは無いようにしたいです。

質疑応答に関しては、自分は専制型の教師が生徒に及ぼす悪影響についての研究を行い、結果としては、タイトル通りの効果が明らかになったのですが、先生方から様々なご意見を頂きました。特にグサツときたのが、「専制型の教師のネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面も考慮してみては？」「専制型の概念が単純化し過ぎているから、もっと細分化してみては？」等々、改善点を頂きました。また、質問の受け答えに際しては、前述した通り、緊張であり良い受け答えになっておらず、もっと練習すべきだったと痛感しました。

反省すべき点でいっぱいでしたが、同時に自分が成長できた場でもあり、貴重な経験をさせて頂きました。また、これらをふまえ精進していきたいと思います。

(発表論文) 専制型の教師が生徒に及ぼす否定的影響：Kurt Lewin らのリーダーシップの類型に基づく検証

○ 鳥山 理恵 (東京大学)

第 64 回大会に参加させて頂きました。発表をするわけでもなく、職場のすぐ近くだと気軽に覗きに行ってみただけだったのですが、思いがけず参加記の執筆という光栄なお役目を頂きました。ありがとうございます。グルダイ学会の参加は 2 度目になるかと思います。院生時代に初め



て参加した際には、社会心理学会との違いがあまりよくわからない...という印象を抱いたように思います (すみません)。

現在私は医学部で思春期の子ども達の大規模コホート調査に心理屋さんとして加わり、「学際研究の壁」を感じる日々ですが、このような体験を経て、今回の大会では新たな視点からグルダイ学会の魅力に気づくことができました。専門分野が異なると、議論がどうしてもかみ合わないことや、一見同じテーマを扱ってはいるもののそれぞれの興味が全く別の方向を向いてしまっている、といったことも多いかと思えます。今回参加させて頂いたセッションでは、方法論的にも理論的にもバックグラウンドの異なる人たちが、みんな同じ方向を向いて議論しているという点に大変感銘を受けました。私にとって今回の学会は、専門分野の異なる人たちがどう良い具合に融合できるか、社会心理学の有用性を医学やその他研究分野の人たちにどうアピールしていけるかといったことや、学際研究のプラットフォームとしての学会の可能性、といったアイデアを頂く場となりました。

そして私はこれを機に（やっと）グルダイ学会に入会させて頂きました。入会の誘い文句として、多くの先生方から「アットホームな雰囲気での議論ができる」、「こじんまりとしていて楽しい」といったお言葉を頂きましたが、そういったイメージが皆さんに共有されているのはとても素敵なことだと感じます。今後私もそういった議論の輪の中に混ぜて頂けるのが今からとても楽しみです。

★★★ 201¹⁶年度 優秀論文賞 ★★★

選考経過と結果の報告

機関誌編集担当常任理事
三浦麻子（関西学院大学）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第 56 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著論文 11 編、資料論文 2 編の計 13 編でした。9 月 4 日に編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて、9 月 24 日を締め切りとして投票をお願いしました。18 名の編集委員から投票が届き、規程に従って、1 位票に 3 点、2 位票に 2 点、3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、9 月 29 日に優秀論文選考委員会を開催して協議した結果、以下の 2 編に今年度の本学会優秀論文賞を授与することを決定しました。

樋口収・下田俊介・小林麻衣・原島雅之（著）

「行動免疫システムと福島県近隣の汚染地域の推定との関連」

（第 56 巻 1 号 Pp. 14-22）

日比野愛子（著）

「生命科学実験室のグループ・ダイナミックス：テクノロジカル・プラトールからのエスノグラフィ」

（第 56 巻 1 号 Pp. 82-93）

なお、大会の総会においてこの結果を報告し、授賞式を行いました。樋口先生はじめ共著者の皆さん、日比野先生、誠におめでとうございます。益々のご研究のご発展を心より祈念しております。

受賞者の声

樋口収・下田俊介・小林麻衣・原島雅之（2016）

行動免疫システムと福島県近隣の汚染地域の推定との関連

（第 56 巻 1 号 Pp. 14-22）



この度は、歴史ある日本グループ・ダイナミックス学会の優秀論文賞を賜り、誠にありがとうございました。本論文は、審査をしていただく過程で、審査者の先生方から、（社交辞令などではなく）本当に有意義なご提案・ご指摘を数多くいただきました。こうした賞をいただけたのも、お忙しい中、貴重な時間を割いて審査をしてくださった先生方の御蔭です。この場を借りて、改めて先生方に御礼申し上げます。また、論文を改稿するにあたって、慶應大学の平石界先生の（研究グループ）から、貴重な情報をご提供いただきました。平石先生の研究グループの先生方にも改めてお礼申し上げます。

本論文は、福島第一原子力発電所の事故によって発生した、いわゆる食品の「風評被害」を引き起こす要因について、実験的検討をおこなったものです。このような研究を行うきっかけとなったのは、福島原発から比較的離れた地域でも「風評被害」が起きているというニュースを耳にしたことがきっかけでした。必ずしも正確な知識をもつわけではない消費者が、どのように食品の安全性を判断しているのか、その判断にはバイアスがかかっているのではないかと考えたのです。実験の結果は予測したとおり、罹患の懸念が高まると（リスク回避的反応が促進されるため）汚染地域をより広く推定し、広い範囲の食品を忌避する傾向があるというものでした。

今、この論文を改めて振り返り、最初に思い出されるのは、実験刺激を作ることが大変だった

ということです。私の実感ではありますが、この研究文脈では罹患の懸念に対する個人差（感染脆弱意識）の影響が強いため、実験操作の影響が出にくく、実験操作が難しいのです。論文を投稿するにあたり、個人差の効果しか出なかった研究を一つの研究として報告するか迷ったのですが、そういう思いもあり、敢えて報告させていただきました。こうした論文もアクセプトしていただけるというのは、実験研究者にとって非常にありがたいことだと感じております。そして、実験刺激を練り上げるために、共同研究者（とくに第二著者である東洋大学の下田俊介さん）と、本当に多くの時間を費やしたのですが、それも良い経験になったと思っております。

最後に、改めてこのような名誉ある賞をくださり、本当にありがとうございました。このような賞をいただいたのは、審査をしてくださった先生方は勿論のこと、ここに至るまで陰に陽に様々な支援をしてくださった先生方の御蔭です。この賞に恥じぬよう、研究にますます勤しんでいきたいと思えます。今後も、先生方から変わらぬご指導・ご鞭撻を賜れば幸いです。何卒宜しくお願い申し上げます。

コメント：樋口収（北海道教育大学・現所属 明治大学）

日比野愛子（2016）

生命科学実験室のグループ・ダイナミックス：
テクノロジカル・プラトーからのエスノグラフィ
(第 56 巻 1 号 Pp. 82-93)



このたびは、優秀論文賞を賜りありがとうございます。大変嬉しく感じています。審査の労をとっていただいた先生方、研究発表の機会にコメントをいただいたみなさん、また、査読のプロセスで丁寧かつクリティカルなコメントをいただいた審査者の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本論文は、不思議な顕微鏡を主人公として、なぜかその顕微鏡を使い続けた生命科学実験室の変化を追ったものです。そもそも私が実験室というフィールドに関わるようになった背景としては、社会と新しいテクノロジーの関係性を考える上で、社会側の受け止め方だけではなく、サイエンスが実際に実行されていく現場の活動に触れたいという問題関心が大きくありました。とはいえ、フィールドワークを始めた当初は、事務補佐員（秘書）として実験室で働いていたこともあり膨大な情報をさばくことに精いっぱいでありました。その後も研究論文としてまとめあげるまでにかなりの試行錯誤が続きました。時間という視点をを用い、「語られていること」と、「語られていないけれども実行されていること」のずれに注目することで、分かりやすいイノベーションにおさまらない、胎動としての集団の動きを示すことができているれば本望です。

フィールドワークにあたっては、京都大学大学院生命科学研究科竹安研究室（当時）にお世話になりました。メンバーのみなさんとは多くの議論を重ねることができ、この経験はさまざまな形でその後のキャリアの土台ともなっています。あらためて感謝申し上げます。生命科学実験室

というフィールドは、社会心理学研究者にとって近くて遠い場所ではないかと思われます。知的生産を担うという意味で実験室は非常に近い場所です。論文中で考察した市場化する環境がもたらす混乱は、他人ごとではなく、自分自身の問題意識とも連動しています。

一方、生命科学の実験室に身をおいていると、装置や試薬をはじめとしたモノ（人工物）の持つ存在感に圧倒されることがしばしばありました。本論文では原子間力顕微鏡という実験装置を取り上げましたが、「使いにくい」、「エキゾチック」など、変わった評価をされながらも知の生産に寄与している装置に私自身も魅力を感じながら、ずいぶん長く調査を続けてきたように思います。近年、モノがさまざまな集団・組織の欠かせない一部だとする見方は、科学実験室の中に限らず、一般に馴染みあるものになってきたようです。デザインの社会的意味や、労働と機械の関係性など、モノのグループ・ダイナミックスにはまだまだ面白いトピックが潜んでいるとみています。今回の受賞を大きな励みに、グループ・ダイナミックスの研究実践をさらに広げていきたいと思います。

コメント：日比野愛子（弘前大学）

★★★ 2017 年度 優秀学会発表賞 ★★★

選考結果の報告

2017 年度優秀学会発表賞選考委員長
有倉巳幸（鹿児島大学）

2017 年 9 月 30 日、10 月 1 日に東京大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会において、「2017 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程につきましては、つぎのとおりです。論文集原稿を対象とした事前審査は、部門ごとに理事全員による投票（一人 1 票）が行われ、各部門上位 3 名（3 発表）が選出されます。その上で、当日に行われる二次審査では、理事を中心に選出された 3 名の審査者がそれぞれの発表を聴き、内容とプレゼンテーションを各 5 点で採点します。最終的に、一次審査の投票数（1 票を 1 点とカウント）と二次審査の採点を加算する方法で決定します。

その結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることが決定いたしました（敬称略）。常任理事会の審議の結果、今回、ポスター発表は該当者なしとしました。理由は、3 名の候補者が同点同位であったこと、及び過去 2 年間の受賞者の点数（15 年受賞者 42 点、16 年受賞者 35 点）より低い 24 点であったためです。

<ロング・スピーチ部門>

- 第一発表者：伊藤言（東京大学）
- 発表題目：なぜあなたと私は政治的態度が異なるのか？
— 5つの道徳基盤から特定のトピックに対する日本人の政治的態度を予測する —
- 共同発表者：橋本侑、中川武治、高野陽太郎（東京大学）

<ショート・スピーチ部門>

- 第一発表者： 木村真利子（立正大学）
- 発表題目： 破壊的カルトにおけるビリーフ・システムの形成・変容／維持・強化（1）
— 集団との接触時点における個人の背景要因に関する検討 —
- 共同発表者： 西田公昭（立正大学）

<English Session 部門>

- 第一発表者： 宮島健（九州大学）
- 発表題目： Psychological safety encourages to resist to normative influence induced by pluralistic ignorance: The mediating role of fear of negative evaluation from others and perceived organizational support
- 共同発表者： 山口裕幸（九州大学）

<ポスター発表部門>

該当者なし

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者には後日、郵送にて賞状が授与されます。

受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（2017年10月31日）から1年間に限って有効です。

受賞者の声

<ロング・スピーチ部門>

伊藤言・橋本侑・中川武治・高野陽太郎

なぜあなたと私は政治的態度が異なるのか？

—— 5つの道徳基盤から特定のトピックに対する日本人の政治的態度を予測する ——



この度は大変名誉のある賞をいただき、大変嬉しく思います。審査員の先生方、学会会場にて貴重なコメントをくださいましたみなさま、そして研究を支えてくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。

世界や社会をメディアが語るとき、「分断」ということばが用いられる頻度が増えてきました（例：分断世界）。人によって政治的な立場や態度は異なる。そして人は自らが信じる正しさを賭けて相争い対立する。自分の恋人や配偶者が安倍首相を熱烈に支持する一方で、自分が「アベ政治」を許せないと感じ共産党や立憲民主党を支持するとき、そのカップル

や夫婦はうまくやっていけるのでしょうか。一緒に建物に暮らすことができるのでしょうか。二人の子どもに「正しさ」を教育することができるのでしょうか。互いに「なぜわかってくれないんだ」と忸怩たる思いを深めていくのではないのでしょうか。米国で最も深刻な問題は「白人と黒人の対立」ではなく実際には「保守とリベラルの対立」の方が深刻だという指摘もありますが（ソフィア・レディ『黄信号の愛：ありそうもない結婚の記』）、日本は果たして例外だといえるのでしょうか。政治的な研究を行っていると、「日本はアメリカほど保守/リベラルというイデオロギー次元での明確な対立が存在しない」との指摘をよく受けます。しかし、たとえその指摘が正しいとしても、個別の重要なトピック（例：自民党や安倍首相の支持/不支持）に対する政治的態度のちがいは、日本においても、人と人との分断を生み出す非常に根源的な存在なのではないのでしょうか。そのさまを、心理学はどのように描くことができるのでしょうか。そして分断に対して何ができるのでしょうか。かつてないほど、政治的態度のちがいについての心理学的研究が求められていると私は考えます。ゆえに本研究を実施しました。

本研究は具体的には、なぜ日本人の政治的態度が人によって異なるかを、道徳基盤理論（Moral Foundation Theory）の観点から検討しました。ある人は憲法 9 条改正や閣僚の靖国参拝に賛成し、ある人は反対する。ある人は自民党を支持し、ある人は共産党を支持する。それは一体なぜだろう？という問いに、「ウヨク」「サヨク」というイデオロギー次元を用いずに答えようとしてしました。すなわち、個別のトピックに対する政治的態度のちがいを、5つの道徳的なツボ（他者を傷つけないこと・公正であること・内集団の紐帯を守ること・上下の秩序を維持すること・聖なるものを守り汚らわしさを避けること）を重視する程度のちがいで説明しようと試みました。

なぜ人によって政治的態度が異なるかを問うとき、「遺伝レベルの個人差→生理的反応レベルの個人差→認知・感情的な情報処理レベルの個人差→パーソナリティ・価値観レベルの個人差→保守/リベラル（右/左）という政治的イデオロギーレベルの個人差→特定の問題に対する政治的態度の個人差」という連鎖構造を考慮に入れる必要があるとの議論（Smith et al., 2011）に共鳴し、日本人を対象とした研究を進めています。本研究はその中でも、「パーソナリティ・価値観レベルの個人差」に焦点を当てた研究でしたが、本受賞を励みとし、政治的な「分断」にことごとコントロール性を与える研究を、引き続き微力ながらも前へ進めていきたいと考えております。また、みなさまと議論をさせていただけますと大変光栄に思います。ありがとうございました。

コメント：伊藤言（東京大学）

<ショート・スピーチ部門>

木村真利子・西田公昭

破壊的カルトにおけるビリーフ・システムの形成・変容／維持・強化（1）

—— 集団との接触時点における個人の背景要因に関する検討 ——

この度は学会発表賞という名誉ある賞を賜り、大変ありがたく存じます。選考して下さった先生方、そして発表をご覧いただき貴重なご意見やご質問をくださった先生方に、心より感謝申し上げます。



本発表では、破壊的カルトと呼ばれる団体への入会や活動継続に関わる要因について検討した研究の一部をご紹介します。破壊的カルトへの入会をめぐるのは、いわゆるマインド・コントロールのような社会的影響力によって入会したという見方がある一方で、入会者本人の入会当時の心理的状況やパーソナリティといった個人要因の影響を考えることも重要です。本研究はマインド・コントロールと個人要因の両側面から検討を行ったものでしたが、今回の発表では個人要因である心理的状況やパーソナリティに関する結果のみ抜粋して発表致しました。破壊的カルト入会者では、とくに人生の意味や社会のあり方などに対する意識の強さが、組織の信念の受容度を高めており、非入会者と比較してもこの意識は高くみられることが示されました。ただ、今回取り上げた様々な心理的状態やパーソナリティ要因は、入会者と非入会者の間でそれほど差がないものが全体的に多く、この点は大変興味深い部分でした。

破壊的カルトについては、あまりご存じでない方も多いかと思いますが、短い時間の中で説明不足であった面も多々あったことと思います。今回は初の口頭発表で、時間配分や説明の仕方などで至らない点は多くあったかと思いますが、頂いた賞を励みに今後も研究を進め、積極的に発表を重ねていければと思っております。最後になりましたが、日頃ご指導を頂いております西田公昭先生や、研究室のみなさま、そして本研究を実施するうえで様々なサポートを下さった多くの当事者・関係者のみなさまに、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

コメント：木村真利子（立正大学）

< English Session 部門 >

宮島健・山口裕幸

Psychological safety encourages to resist to normative influence induced by pluralistic ignorance: The mediating role of fear of negative evaluation from others and perceived organizational support



この度は、このような名誉ある賞をいただき、とても光栄に思います。お忙しいところ、ご選考くださった先生方や、発表に対して貴重なご意見をくださった先生方に深くお礼申し上げます。

先行研究は、日本の男性による育児休業の取得率の低迷に多元的無知 (pluralistic ignorance) が関与していることを明らかにしました (Miyajima & Yamaguchi, 2017)。すなわち、男性個々人の取得願望は高いにもかかわらず、他者が育児休業に否定的だと思い込むことで取得を控えてしまう傾向があると示唆されています。本研究ではそうした文脈において、組織における心理的安全 (psychological safety) 風土を高く知覚することが個人の意見表明意図 (e.g., 男性でも育児休業の取得は認められるべきだ、などの主張) を促

進すること、そして、心理的安全風土に対する知覚と意見表明意図との関係を他者評価懸念と知覚された組織的サポートが媒介することを示しました。

多元的無知によって人々が望まない規範や文化が維持される現象は、童話「裸の王様」に端的に描かれています。その童話では、純粋な子供による言葉「王様は裸だ！」によって事態は終焉を迎えました。規範への同調圧力は、圧力源が“一枚岩”でないと弱まることを踏まえれば、規範に異を唱えることが社会に変革をもたらす契機になると考えられます。本研究から得られた知見は、組織における心理的安全風土が、男性の育児休業を支持する意見の公での表明を促進し、それが組織全体へと波及するというダイナミックスを通じて、多元的無知の影響を弱体化させる可能性を示唆しています。

今回の発表は、私にとって、学会というオフィシャルな場において英語で口頭発表する、初の経験でした。ゆえに、入念に準備を進めてきました。具体的には、(英語での説明をその場で考えながらプレゼンなんて、とても無理なので) 規定の発表時間に収まるセリフを予め準備して、想定される質問とそれに対する回答もいくつか用意して臨みました。驚くことに、私以外の全ての発表者の先生方はカンペなど使わずに、しかもとても流暢な英語でご発表されていました。私は諸先輩方の胸をお借りするつもりで、一生懸命、研究成果をプレゼンさせていただきました(「どうしても伝わらなかったら、最悪日本語で説明すればいいや」と開き直って)。幸いにも日本語は使わずに済みましたが、こうしたなかで、高く評価していただけたことを大変嬉しく思います。このことは、必ずしも英語の流暢さのみで評価が決まるわけではないことを示しています。最近では、院生の方々でも国際誌へ投稿する方が増えています。自身の研究成果を国際的に発信する第一歩として、グルダイの English session に積極的に挑戦するのはよい経験になるかもと感じました。

コメント: 宮島健 (九州大学)

★★★ 国際学会大会参加記 ★★★

○ 鈴木 啓太 (東京大学)

この度、国際学会発表支援制度のご支援をいただき、2017年8月26日から28日までニュージーランドのオークランドで開催された2017年アジア社会心理学会に参加させていただきました。支援制度に採択いただき誠にありがとうございます。

本学会は私にとっては、発表者として参加する初の学会となりました。その緊張もあったためか、事前にオークランドの気候を調べた際に、誤ってアメリカのオークランド (Oakland) の気候を調べてしまい、



「南半球なのに意外と暖かい」と日本出発直前まで誤解をしたままでおりました。直前にそのことに気づき、上着やセーターをかき入れたものの、現地に着いた時には年に一度の規模の強風が吹き荒れておりました。

そのような緊張と多難に見舞われつつ、会場の Massey 大学に向かいましたが、結果的にはとても楽しく、意義のある初学会になりました。まず発表者として、多くの国の研究者と交流できたことは貴重な体験となりました。中国、韓国、フィリピンなど様々な国の人から、様々なコメントを頂きましたが、自分たちとの着眼点の違いに驚かされました。私は、暗黙理論と呼ばれる努力の可変性に関する信念を研究テーマとして扱っています。このテーマは社会心理学のみならず、教育の分野などでも議論されることの多いテーマです。議論を通じて、このテーマに関する様々な視点の背景に、それぞれの国の教育事情などがあることを感じる事ができました。文化差の研究ではひとくくりにされがちアジアでも、その違いに着目する意義もあるのではないかと思います。日本の中だけでは得られなかった気づきだと感じています。

今回の経験を活かし、より一層研究に邁進していく所存です。末筆ではございますが、このような機会をいただいた日本グループ・ダイナミックス学会に心より御礼申し上げます。この度はご支援いただき、誠にありがとうございました。

★★★ 事務局からのお知らせ ★★★

研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。昨年度は6名の会員への補助を行いました。今年度も引き続き募集しています。年齢の制限はありませんし、複数の論文校閲費を合算して申請できます。また、補助対象となった会員の方々についても、年度を超えれば改めて申請することが可能です。皆さまで奮って申請してください。詳細については学会ホームページをご参照いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html

国際学会発表支援制度について

昨年度から日本国外で開催される国際学会での発表支援を行う形に改正いたしました。アジア社会心理学会だけではなく、他の国際学会での発表に対する支援を毎年度実施いたします。今年度は1名の会員に対して支援を行いました。申請締め切りの時点で発表予定のものだけではなく、すでに発表したものも支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。来年度の締め切りは7月31日（火）の予定です。詳細については学会ホームページをご参照いただければ幸いです。皆さまからの応募をお待ちしております。

学会 HP: <http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>

実験社会心理学研究 掲載予定論文

<原著論文> (※印は早期公開済)

- 織田涼・服部雅史・八木保樹
検索容易性効果のメカニズム：認知負荷と認知欲求の影響※
- 谷口友梨・池上知子
対人認知場面での自発的推論を規定する要因：解釈レベル理論に基づく検討※
- 出口拓彦
教室における私語の頻度と規範意識・行動基準の関連：
個人レベルおよび集団レベルの影響に着目して※
- 仙波亮一
自己愛タイプ別に見た労働者の自我脅威の知覚が対処方略に及ぼす影響※
- 矢守克也・李勇昕
「Xがない、YがXです」 — 疎外論から見た地域活性化戦略 — ※
- 齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり
大学生における司法参加意欲の規定因：要因関連モデルを用いた検討

<資料論文> (※印は早期公開済)

- 安藤香織・大沼進
東日本大震災後の節電行動の規定因の検討 — 記述的規範の影響に着目して — ※
- 竹ヶ原靖子・安保英勇
日常的コミュニケーションから予測する潜在的援助者のコスト※
- 柳学済・堀田美保・唐沢穰
外集団成員との相互作用の予期が集合的罪悪感に与える影響

現時点で冊子として公刊されていない掲載決定論文は上記のとおりです。掲載決定論文は、速やかに [J-STAGE](#) で早期公開いたします。冊子の発刊は年間2号と決まっておりますので、掲載号は掲載決定本数と刊行タイミングとの関係に応じて決定します。ご了解下さい。

次年度大会について

次期大会は大坪庸介先生を大会準備委員長として、神戸大学文学部にて開催されます。会期は2018年9月8日、9日です。

★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会 事務支局
〒 602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷（株）学会フォーラム内
TEL : 075-415-3661
FAX : 075-415-3662
E-mail : jgda@nacoss.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒 631-8502 奈良市山陵町 1500
奈良大学社会学部 西道実 研究室
TEL : 0742-44-1251 (代表)
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷（株）営業部編集校正課内
TEL : 075-441-3155
FAX : 075-417-2050
E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

報用の Twitter アカウント運用開始

前号でもお知らせしましたように、本学会の活動をお伝えすべく、Twitter のアカウントを本学会の広報用として 2017 年 8 月より運用しております。

https://twitter.com/jgda_pr

大会の案内や論文の早期公開の情報などを発信するなどしております。Twitter ご利用の方、また使ってみたいとお考えの方、ぜひフォローしていただいて、本学会の広報を多方面にご紹介いただけますと幸いです。

広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部 杉浦淳吉 研究室（広報担当 常任理事）

<名古屋大学大学院教育発達科学研究科 鵜子修司（広報補佐員）>

E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

（マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください）
